

『マーディ』での若きメルヴィル — (3) — 喪失と幻滅 —

五十嵐 博^{*1}

Young Melville in *Mardi* — (3) — Deprived and Disenchanted —

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Mardi is an allegory, the main theme of which is a real world named Mardi where sins and evils abound. Taji, the protagonist and his companions try to seek out ideal innocence, happiness, and peace, only to be disillusioned and repelled by many a wrong and vice they encounter throughout Mardi.

The most repulsive is gloomy Maramma, which represents domineering ecclesiastical system and whose institutional religion Taji and others reject. Babbalanja, speaking for Melville's rational judgment based on his acquired wisdom, decides to stay in Serenia where Christian love and faith are practiced "without priests and temples," and concludes his voyage there, whereas Taji, who stands for Melville's instinct, turns his back on Mardi and pursues lost innocence into the outer seas while being pursued by avengers who incarnate Melville's sense of guilt.

Taji's final behavior in the last chapter implies the downright refusal and denial of the human world and its reality that include existing Christendom and Christian faith.

3. テーマと結論

『マーディ——そこでの航海』(*Mardi: and A Voyage Thither*, 1849) は、イノセンスの喪失と現実世界への幻滅を基調とする寓意物語である。メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) は、この非常に長い作品で、最終的に一体何を言いたかったのだろうか? 作者は何をテーマに据えてこの作品を書き、どのような結論を読者に提示しているのか?

この長編の中心課題は、失われた理想の純真さと純潔の探求であり、その探求に付随して、真実とは何か、幸福とは何か、死とは何かなどの問いかけが副次的課題として発せられる。これらの課題や問いかけを含めて、作品全体を包括するメイン・テーマは、作品のタイトルになっているマーディ、つまり、罪と悪を抱えた現実の世界である。そして、「私」メルヴィルはこの現実世界にいかに対処すべきかという自問に対する自答が、この作品の結論となって

いる。

メルヴィルは2つの答を出している。「後天的知恵」が出す答と、「本能」が発する答である。本論考(1)の冒頭で言及したように¹⁾、『マーディ』執筆途中で英国の出版者ジョン・マレー (John Murray) 宛てに出した手紙(1848年3月25日付)の中でメルヴィルは『マーディ』執筆プランの方向転換を伝え、その理由として「我が本能は、ロマンスを出せと言っています。そして、言わせてもらえば、本能は預言者のようなものであり、後天的な知恵よりも良いものです」(*My instinct is to out with the Romance, & let me say that instincts are prophetic, & better than acquired wisdom*)²⁾と書いた。「後天的知恵」が指示することよりも「本能」の命令に従うことの方を選択するというメルヴィルのこの言葉は、『マーディ』の核心を理解するための鍵となる。

「後天的知恵」の答は、理性と知恵の代弁者ババランジャが出し、「本能」の答は、「本能」の代弁者たる「私」タジが発する。「本能」の答が究極の結論であり、『マーデ

2009年2月24日受理

*1 東海大学海洋学部清水教養教育センター非常勤講師 (The General Education Center, Shimizu, The School of Marine Science and Technology, Tokai University)

ィ』の結論である。では、それはどのような結論なのだろうか？

3.1 マラマ島——キリスト教界

『マーディ』の第2巻はマラマ島で始まるが、このマラマ島と、「後天的知恵」が下す結論、および「本能」が下す結論は因果関係を構成している。マラマ島の因習的宗教体制が原因となり契機となって『マーディ』の結論が導き出されるのである。

マラマ島とは何か？まず島の描写を見てみよう。この島の中央には大尖峰がそびえており、マーディに影を落としている。ババランジャは「なにゆえに、お前の影はマーディを覆うのか！すでに陰っている斜面地に新たな陰を、陰の上に陰を投げかけるのか！」(how comes it that thy shadow so broods over Mardi; flinging new shades upon spots already shaded by the hill-sides; shade upon shade! — *Mardi*, Ch. 105, p. 323.)³⁾と声を上げ、ユーミィは「その影の落ちるところ、楽しき花は芽を出さず、そこに長く住む者は顔も魂も翳ってしまう」(where that shadow falls, gay flowers refuse to spring; and men long dwelling therein become shady of face and of soul. — *ibid.*)と言う。そしてモヒによれば、「島中の木は1本として果実を実らせることはなく、食用になる木の根はひとつとして育たず、人々は近隣の島々から送られて来る大量の貢物に全面的に依存している…土壌はきわめて肥沃なのだが、この住民たちはこの聖なる島にパンノキを栽培するのはよくないと言う」(not one solitary tree bearing fruit, not one esculent root, grows in all the isle; the population wholly depending upon the large tribute remitted from the neighboring shores... [The soil] is extremely fertile; but the inhabitants say that it would be wrong to make a Bread-fruit orchard of the holy island. — *ibid.*, Ch. 105, p. 324.)のである。島の中央の大尖峰は大聖堂や教会の尖塔の寓喩であり、貢物に全面的に依存して生きる住民たちは聖職者たちを寓意する。

さらに、マラマ島にはマーディ群島の最高神オロ(Oro)の神殿があり、教皇(Pontiff)という呼称のヒヴォヒティー1848世(Hivohitee MDCCCXLVIII)がここに君臨している。オロ(Oro)というのは、白人キリスト教文明に侵食される前のポリネシアに実際に存在し崇められていた神の名称であるが、このオロ神をメルヴィルは、キリスト教の神の寓喩として使用している。そして、キリストの寓喩として預言者アルマ(Alma)を創造し登場させている。『マーディ』が執筆された西暦1848年の時点で、ヒヴォヒティー1848世という数字を使用していることから明々白々であるように、メルヴィルはマラマ島をローマカトリック教界ないしキリスト教宗教界全体の寓喩として描いている⁴⁾。しかも偽善と虚偽に満ちて醜悪な領域として描いている。

メルヴィルは作家としての当初から、教会と聖職者の偽善を批判している。処女作『タイピー』(*Typee; or, a Peep at Polynesian Life*, 1846)と第2作『オムー』(*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, 1847)では、具体的事例を挙げて、直截な言葉でキリスト教の宣教師と宣教活動を非難した。タヒチではカトリックとプロテスタントの両方を、サンドイッチ諸島(現ハワイ諸島)の事例ではプロテスタントの宣教師と宣教活動を糾弾した。

第3作『マーディ』を出版してから5年後に発表した『2つの礼拝堂』(*The Two Temples*, 1854)という短編でもメルヴィルはキリスト教会の姿勢を批判している。この短編は、貧しい身なりの私がニューヨーク市の新礼拝堂の日曜朝の礼拝に入れてもらえず、こっそりに入った結果、警察に突き出されて罰金刑を受けたが、ロンドンの礼拝堂での土曜夜の宗教劇の観劇では、労働者階級の人や子供から真正な慈善を受けたという内容の話だが、この話の冒頭でメルヴィルは、俗物的な新礼拝堂係員の態度を次のように叙述している。

「ひどいものだ。その図体のでかい腹の突き出た教区小役人面の男は、人を見下した態度で、私の嘆願に対して、席がないと答えた。それは、貧乏人は入れないと言っているのと同じだった。しかし賭けてもいいが、嘘つきの仕立屋が約束したとおりに私の新しいコートが昨晩出来上がっていたら、そしてこの晴れた朝にそのコートでめかしこんで、あの太鼓腹の教区小役人面の男の手のひらを^きでくすぐってやったら、そうしたら、席があろうかならうが、私はこの大理石の控え壁で支えられ、スタンドグラスで飾られたぴかぴかの新礼拝堂内の素晴らしい席に着いたことだろう」。(Too bad. And how disdainful the great, fat-paunched, beadle-faced man looked, when in answer to my humble petition, he said they had no galleries. Just the same as if he'd said, they didn't entertain poor folks. But I'll wager something that had my new coat been done last night, as the false tailor promised, and had I, arrayed therein this bright morning, tickled the fat-paunched, beadle-faced man's palm with a bank-note, then, gallery or no gallery, I would have had a fine seat in this marble-buttressed, stained-glassed, spic-and-span new temple.)⁵⁾

こうしたメルヴィルのキリスト教会批判は、マラマ島の寓意的描写の中では、分かりやすく誇張されて表現されている。マラマ島の案内人である盲目の老人は、極端なまでに俗物的に、犯罪的なまでに強欲に描かれている。盲目の案内人はマラマ島に来る巡礼者たち全員に法外な案内報酬を要求し、杖を突いてぼろをまとっている老人からは、そのぼろ着を案内報酬代わりに剥ぎ取るという仮借なさを発

揮する。

タジー一行は、法外な報酬を要求するこの盲目の案内人を雇うことを断り、モヒの案内でマラマ島内の各所を見て回り、その過程で彼らはアルマ、つまりキリストについて話し合うが、一行は全員、キリストの存在意義を認めていない。ババランジャはキリスト降臨後の世界でキリスト教徒たちが行ってきた悪行を次のように批判する。

「預言者は、私たちマーディ人をもっと徳高く幸福にするために来た。だが、アルマ以前にあった善とともに、アルマの時代にあったのと同じ戦争、犯罪、悲惨な状況が形を少し変えて今も存在する。いや、モヒよ、お前の年代記から、名ばかりのアルマ信徒たちの行為がもたらした数々の恐怖の歴史を除外してみよ。そうすればお前の年代記にはそう頻繁には血生臭い話は出てこないだろう」。(The prophet came to make us Mardians more virtuous and happy; but along with all previous good, the same wars, crimes, and miseries, which existed in Alma's day, under various modifications are yet extant. Nay: take from your chronicles, Mohi, the history of those horrors, one way or other, resulting from the doings of Alma's nominal followers, and your chronicles would not so frequently make mention of blood. — *Mardi*, Ch. 113, p. 349.)

「私はアルマを全面的に拒否する」(I wholly reject your Alma — *ibid.*) と言うババランジャは、アルマ、つまりキリストにまつわる寓話、キリスト教宗教界、そしてキリスト教を信奉する世間を否定する。メディアは「お前たちのアルマ信仰は私には関り合いがない。私は王であり半神である。したがって、平民の苦悩は平民たちに任せる」(your Alma's faith concerns not me: I am a king, and a demi-god; and leave vulgar torments to the commonality. — *ibid.*, Ch. 113, p. 350.) と言ってキリスト信仰と距離を保つが、ユーミィは「私は拒否する。信じることができるとしても、私は信じない。私の心が命じることと食い違っている。本能的に私の心は拒否する」(I reject it. Could I, I would not believe it. It is at variance with the dictates of my heart; instinctively my heart turns from it — *ibid.*) と述べて、ババランジャと同様にキリスト信仰の拒否を明言する。モヒの態度ははっきりしないが、後のセレニア上陸前に「マラマは私の暗い気持ちを増大させるだけだ」(Maramma but adds to my gloom. — *ibid.*, Ch. 185, p. 619.) と彼は語る。

このようにババランジャ、メディア、ユーミィ、モヒの全員が、それぞれの視点からマラマ島を、つまり、マラマ島が寓意するキリスト教支配体制を拒否している。

3.2 「後天的知恵」の結論——キリスト的愛の実践とヒューマニズム

「後天的知恵」とは何か？それは、現実社会に適合するための世間知であり、世間の求めに応じた振る舞いをするためのノウハウであり、メルヴィルの場合、彼が住んでいた19世紀のキリスト教体制下の白人社会と軋轢を起こさない言動を意味した。メルヴィルはババランジャの口を通して、キリスト教社会の要求に対応する術を以下のように語る。

「マラマでは信仰者か偽善者のいずれかになる必要があることを、そしてこの地で正直であることには危険が迫ることを、私ババランジャほど肝に銘じている者はいないでしょう」。(there is no man, that bears more in mind the necessity of being either a believer or a hypocrite in Maramma, and the imminent peril of being honest here, than I, Babbalanja. — *ibid.*, Ch. 113, p. 349.)

また、メディアの口を通してメルヴィルは、

「お前の思索がまとっている自由で軽快な衣は夢にすぎない。夢を見続けている間は真実のように思えるが、目を醒ましてこの正統な世界に戻って来れば、お前は直ちに旧来の習慣に立ち帰る。夢の中で東洋の最果ての地へ飛んで行けても、その夢を見ている間も、お前はここに住んでいる。ババランジャよ、お前たち人間はマーディに暮らしており、他所へはいけないのだ」(The free, airy robe of your philosophy is but a dream, which seems true while it lasts; but waking again into the orthodox world, straightway you resume the old habit. And though in your dreams you may hie to the uttermost Orient, yet all the while you abide where you are. Babbalanja, you mortals dwell in Mardi, and it is impossible to get elsewhere. — *ibid.*, Ch. 120, p. 370.)

と語り、あくまでマーディというキリスト教世界の現実の枠内で、世間一般の考え方に準拠した行動をしなければ生きていけないという認識を吐露している。

こうした「後天的知恵」が見出した結論が、セレニア島におけるキリスト的愛の実践なのである。セレニアはアルマ、つまりキリストの愛の信奉者たちが住む島で、マラマ島、つまり既存のキリスト教宗教界とは異なり、礼拝堂はなく、聖職者もいない。セレニアに住む人々全員がアルマの使徒であり、愛に信を置き、愛を生き方として実践している。

セレニア上陸直後のババランジャは、アルマの存在理由を認めておらず、逆にアルマ信仰がもたらしている負の側

面をこう指摘する。

「マラマとそのすべての属島において真の兄弟愛はない。聖なる島においてさえ多くの人々が迫害されており、異端という理由で殺戮が行われている…子供の頃から私は、アルマの名において行われる数々の不正、アルマに従う者たちが犯す罪と矛盾の数々を目にしてきた」。(in Maramma and in all its tributary isles true brotherhood there is none. Even in the Holy Island many are oppressed; for heresies, many murdered... even from my infancy, have I witnessed the wrongs committed in his name; the sins and inconsistencies of his followers. — *ibid.*, Ch. 187, p. 625.)

ババランジャの指摘に対してセレンアの老人は、

「主の信念の核心にあるものはすべて、ここマーディに存在していた。主がやって来るずっと前から、小さな谷間でつましく実践されていた…真理、正義、愛は、アルマだけが啓示したものでしょうか？アルマが来るまで耳にされたことはなかったのでしょうか？おお！アルマは私たちに私たち自身の心を開いて見せてくれているにすぎない」(All that is vital in the Master's faith, lived here in Mardi, and in humble dells was practiced, long previous to the Master's coming... are Truth, Justice, and Love, the revelations of Alma alone? Were they never heard of till he came? Oh! Alma but opens unto us our own hearts. — *ibid.*, p. 626.)

と言い、アルマが説いたことは元々人の心の中にあったものであり、セレンア島に住む人々はそれを「聖職者や礼拝堂なしで」(without priests and temples — *ibid.*, p. 629.)実践していると説明する。

ババランジャが「あらゆる側面で彼、アルマは私たちの社会制度と軋轢を起こすだろう」(On all sides, would he [= Alma] jar our social systems. — *ibid.*, p. 628.)⁶⁾と言うと、老人は「ここではそうじゃない、ここでは違う！」(Not here, not here! — *ibid.*)と即答する。つまり、セレンアはマーディ世界の中で隔離された地であり、非体制的な宗教集団だけが住む場所である⁷⁾。

老人との対話の後、最終的に、まず賢人ババランジャが跪き、続いて青年詩人ユーミィ、老歴史家モヒ、王メディアの順に跪いて、アルマの愛に帰依する。そしてセレンアに留まることを選択したババランジャが、タジに向けてこう言う。

「私の航海は終わった。私たちが探し求めたものが見つかったからではなく、マーディで私が探し求めて手に入れられるものをすべて、今、私は手に入れたからだ。

私はここにとどまり、もっと賢くなろう。そして私はアルマのものとなり、この世界のものになる。タジよ！イラーを探してもむだだ。彼女はお前を欺く幻にすぎない。狂ったようにお前が彼女を探す一方で、お前の犯した罪が叫び声を上げ、復讐者たちがお前の後を追いつけるだろう。しかし、彼らはここへはやって来ないかもしれない。お前を誘惑するために跡をつけて来る者たちもここへは来ないかもしれない。賢人の忠告を聞け。私たちが探し求めるものはすべて、私たちの心の中にある。探求へと駆り立てるものが多くの者には必要だが、それを私は聖アルマの中に見出した…今一度言う。タジよ！お前のイラーは絶対に見つからないだろう。仮に見つかったとしても、お前にとって何の役にも立たないだろう。それでも探したければ探せばよい。お前の言うように、まだ訪れていない島々がたくさんある。そして、すべてを見たら、戻って来て、ここでお前のイラーを見つけよ」。(My voyage is ended. Not because what we sought is found; but that I now possess all which may be had of what I sought in Mardi. Here, I tarry to grow wiser still:—then I am Alma's and the world's. Taji! for Yillah thou wilt hunt in vain; she is a phantom that but mocks thee; and while for her thou madly huntest, the sin thou didst cries out, and its avengers still will follow. But here they may not come: nor those, who, tempting, track thy path. Wise counsel take. Within our hearts is all we seek: though in that search many need a prompter. Him I have found in blessed Alma... Once more: Taji! be sure thy Yillah never will be found; or found, will not avail thee. Yet search, if so thou wilt; more isles, thou say'st, are still unvisited; and when all is seen, return, and find thy Yillah here. — *ibid.*, Ch. 189, pp. 637-8.)

ババランジャのこのメッセージの中で最も重要な箇所は「マーディで私が探し求めて手に入れられるものをすべて、今、私は手に入れた」という文言である。つまり、ババランジャにとって、この探求航海は、あくまでマーディという現実世界の枠内での航海であり、セレンアにとどまるという彼の選択は、その枠内での結論なのである。

メディアもババランジャと同様の考え方をしており、『マーディ』最終章でモヒとユーミィに向かってこう言う。

「セレンアでのみ、お前たちの探し求める平安は見つかるだろう。そこへタジを連れて行かねばならない。さもないと彼は殺されるか行方不明になってしまうだろう。行って、ホーシャのとりこになっている彼を解放せよ。復讐者たちを振り切り、セレンアに到達せよ」。(In Serenia only, will ye find the peace you seek; and thither ye must carry Taji, who else must soon be

slain, or lost. Go: release him from the thrall of Hautia. Outfly the avengers, and gain Serenia. — *ibid.*, Ch. 195, p. 654.)

セレンシアにとどまるのはババランジャだけだが、タジ以外の他のマーディ巡航メンバー全員が、マーディ世界に適合しようとする「後天的知恵」を共有する。マーディという現実世界の枠内に暮らしながらキリスト的愛を実践しようとする姿勢は、当然メルヴィル自身の姿勢の一部であり、メルヴィルのヒューマニズムの表明でもある。

『マーディ』には、奴隷制度の否定、さまざまな不正や社会悪の糾弾が随所に見られるが、ヒューマニズムの視点からの結論は、この作品の最後で、マーディ巡航に終止符を打ちセレンシア定住を決意したババランジャが青年ユーミィに向けて言う次の言葉に集約されている。

「全マーディを自分の家と考えよ。国家は名称にすぎない。そして大陸は移ろいゆく砂でしかない」。(Take all Mardi for thy home. Nations are but names; and continents but shifting sands. — *ibid.*, Ch. 189, p. 638.)

つまり、国家・民族や大陸は垣根とはならないし、そうした分け隔ては存在すべきでなく、世界と人類は1つという思想をババランジャは語っているが、この思想は『マーディ』の冒頭部分で既に、語り手としての「私」が理想主義的に語っていた考え方と同一である。作品の冒頭部分で語り手の「私」は、捕鯨船から一緒に脱走する相棒ジャールの祖先に関する話から旧約聖書創世記の物語へと飛び、人類は皆兄弟という人間観を展開する。偏見の否定と自由・平等・友愛の精神を文字化した後、「私」は天上の世界へと想いを駆け巡らせて次のように語る。

「だれもかれも皆、本質的には兄弟である——ああ、本当に兄弟だったら！…じろじろ見たり、しかめっ面をしたりするのはやめよう。ニュージーランド人の入れ墨は驚異ではないし、チャイナ人の流儀も謎ではない。どんな風習も奇異ではないし、どのような信条も馬鹿げたものではない。最終的に友とならない敵はいない」。(one and all, brothers in essence—oh, be we then brothers indeed!... Away with our stares and grimaces. The New Zealander's tattooing is not a prodigy; nor the Chinaman's ways an enigma. No custom is strange; no creed is absurd; no foe, but who will in the end prove a friend. — *ibid.*, Ch. 3, pp. 12-3.)

続けて、捕鯨船の乗組員たちの間で交わされる共通語に言及し、それを「世界語」と呼ぶ。

「さて、老ジャールの話す言葉には、イディオム、つ

まり特異な比喩表現というものがあった。根っからの船乗りというのは世界人すぎて、イディオムなんてものは使わないのだ。マニラ出身の人間、アングロサクソン人、スペイン人とインディオの混血人、インド人、デンマーク人など、あらゆる種族の船乗りたちと長く仲間づきあいをしていると、そのうちに、母語でもぐもぐと意味不明なことを口にすることがなくなる。自分の属していた氏族や民族は沈み、船首楼の水夫部屋の共通語で楽しくしゃべりながら、世界語を話す」。(Now, in old Jarl's lingo there was never an idiom. Your aboriginal tar is too much of a cosmopolitan for that. Long companionship with seamen of all tribes: Manila-men, Anglo-Saxons, Cholos, Lascars, and Danes, wear away in good time all mother-tongue stammerings. You sink your clan; down goes your nation; you speak a world's language, jovially jabbering in the Lingua-Franca of the forecastle. — *ibid.*, Ch. 3, p. 13.)

捕鯨船の船乗りであったメルヴィルは、いわば世界人、地球人であった。だからメルヴィルは前作『オムー』の最終章で「国ということに関しては、船乗りは特にどの国民にも属していない」(As for our country, sailors belong to no nation in particular. — *Omoo*, Ch. 82, p. 313.)⁸⁾と主張した。

メルヴィルのヒューマニズムないし人道的姿勢(humanitarianism)は、『マーディ』出版直後の1849年3月31日に *The Literary World* に匿名で発表された彼の書評「パークマン氏の旅」(*Mr Parkman's Tour*)の中にも表明されている。これは、インディアン部族の中で暮らした白人がその体験談を著した本の書評であるが、その中でメルヴィルは、インディアンなる野蛮人は自分たち文明人と同じ人間であり軽蔑の対象ではないと、次のように書いている。

「よくあるケースだが、野蛮人の間で暮らす文明人はすぐに野蛮人を軽蔑するようになる。多くの場合、こうした感情は自然なものではあるが、弁護しうるものではないし、かつ、完全に間違っている。なぜ我々は彼らを軽蔑すべきなのか？…野蛮人を軽蔑しなくなったら、そうすることによって私たちは私たちの祖先を中傷していることを肝に銘じるべきだ。私たちの祖先も野蛮人だったのだから…インドの盗賊やボルネオの血なまぐさいダヤク族の中にも高く偉大な知性の萌芽が存在する。私たちは皆、アングロサクソンもダヤク族もインディアンも、ひとりの人間から生じ、ひとつのイメージに形作られた。兄弟という認識を今は拒絶していても、いつかは手を握り合うことになるだろう。不運は落ち度ではないし、幸運は賞賛に値するものではない。野蛮人は野蛮人に生まれたのであり、文明人は文明を受け継いでいるだ

けで、それ以上の意味はない。だから侮蔑ではなくて憐れみを」。 (It is too often the case, that civilized beings sojourning among savages soon come to regard them with disdain & contempt. But though in many cases this feeling is almost natural, it is not defensible; and it is wholly wrong. Why should we condemn them?... When we affect to condemn savages, we should remember that by so doing we asperse our own progenitors; for they were savages also... Why, among the very Thugs of India, or the bloody Dyaks of Borneo, exists the germ of all that is intellectually elevated and grand. We are all of us—Anglo-Saxons, Dyaks and Indians—sprung from one head and made in one image. And if we reject this brotherhood now, we shall be forced to join hands hereafter.—A misfortune is not a fault; and good luck is not meritorious. The savage is born a savage; and the civilized being but inherits his civilization, nothing more. Let us not disdain then, but pity.)⁹⁾

タジ以外のマーディ巡航メンバー全員が到達する結論は、メルヴィルのヒューマンイズムの視点からの結論とすることができる。

3.3 「本能」の結論——現世の否定

『マーディ』の究極の結論は最終章で提示される。最終章で「私」タジは、セレンシアへ行けという説得に耳を貸さず、イラーの幻影を追い求めて単身、マーディの外へ向かう。「本能」の代弁者たる「私」タジの最終行動が『マーディ』という作品の、そして作者メルヴィルの究極の結論であるが、その結論にはどのような意味が秘められているのか？

メルヴィルは、端役的存在の登場人物に、タジの言動がもつ意味を解明するための手がかりを付与している。メルヴィルはマラマ島で、既存の宗教体制の犠牲にされる青年を登場させているが、この青年とタジは非常によく似ており、2人には共通して「本能」と「破滅」という言葉が使用されている。

マラマに出現する青年は、タジと同様に「本能」に従って行動する。彼は、報酬を要求する盲目の案内人に対して「あなたの勧告に反する行為をするが、パニよ、私は私の中の聖なる本能に従っているにすぎない」(Though I act counter to thy counsels, oh Pani, I but follow the divine instinct in me. —*Mardi*, Ch. 106, p. 329.) と言って、案内人の導きなして、自らの「聖なる本能」に従い、単独でマラマ島内を巡る。この青年のオロ神に対する考え方を聞いた案内人は青年を「神を冒瀆する者」(blasphemer — *ibid.*, Ch. 109, p. 338.) と呼び、「立ち去れ！ 邪悪なる者よ、お前を待ち構えている地獄に落ちて破滅しろ」(Hence!

thou evil one, to the perdition in store. — *ibid.*) と叫ぶ。

メルヴィルは、この「墮地獄、破滅」(perdition) という語を『マーディ』最終章で再度使用する。最終章で、イラーの残像を追って外海に出ようとし、「マーディよ、さらば！ 舵を私によこせ、老人！」(Mardi, farewell!—Give me the helm, old man! — *ibid.*, Ch. 195, p. 654.) と叫ぶタジに対して、モヒは「いいや、気違いめ！ セレンシアが我々の安息地なのだ。あの瀬戸の向こうには破滅がお前を待ち構えている。あの彼方の深淵から戻って来る航海者は1人もいない」(Nay, madman! Serenia is our haven. Through yonder strait, for thee, perdition lies. And from the deep beyond, no voyager e'er puts back. — *ibid.*) と返答する。

マラマ島にやって来た青年も「私」タジも、「本能」に従って行動し「破滅」に向かう。マラマ島の青年は、最終的には不敬のかどでマラマ島内の信者集団に連れ去られ姿を消す。青年は既存の宗教界の意向に従わなかったために生贄にされたと解釈できる。「私」タジは、現世の歓びを象徴する存在であるホーシャを本能的に嫌悪し、現実世界を寓喩するマーディ群島を囲んでいる大環礁の外へ出る。理想のイラーを求めて巡ったマーディ内の現実世界は、宗教界、政界、そして社会全体に悪が蔓延していたからである。2人の青年の共通項は、反キリスト教体制であり、現実世界の否定であり、それは現実の人間社会の一員としての自己の「破滅」を意味する。

メルヴィルの「後天的知恵」は、この現世では、セレンシアの信仰集団のように、キリスト的愛を実践する生き方の中に心の平安を見出すしかないという結論に至るが、メルヴィルの「本能」はそれを拒否する。「後天的知恵」が勧めるセレンシアへ行かず、純真無垢で純粋なイラーの残像を追ってマーディの外へ飛び出す「私」タジの最終行動は、キリスト教世界とキリスト信仰を含めた人間世界の現実に対する全面的拒否と否定を意味する。

3.3.1 なぜタジはセレンシアへ行かないか？——キリスト信仰の否定

「私」タジは、ババランジャをセレンシア島に残し、メディア、モヒ、ユーミィの3人を連れてイラー探求の航海を続けるが、最終的にホーシャの住むフロツェラ島に上陸してイラーを見出そうとするタジに対して3人は説得を試みる。メディアは「お前のイラーはお前の後ろにいたのであって、前にはいない。青いセレンシアの森奥深くに住んでいるが、お前は探索しようとしなさい」(thy Yillah is behind thee, not before. Deep she dwells in blue Serenia's groves; which thou would'st not search. — *Mardi*, Ch. 193, p. 649.) と言い、モヒは「まだ、善の代わりに悪を見つけようするのか？…ホーシャのとりこにされるな」(Art still bent on finding evil for thy good?... Let not Hautia so enthrall thee. — *ibid.*) と諭し、ユーミィは「ここから遠いところにイラーはいる！」(Far hence is

Yillah! —*ibid.*) と叫ぶ。だが「私」タジは彼ら 3 人の説得を聞き入れてセレンシアに行こうとはしない。なぜか？

タジがセレンシアへ行かない理由を推理するための手がかりは、モヒが語る若者オゾナ (Ozonna) の冒険物語の中にある。失われた乙女アディ (Ady) を探し求める若者オゾナの冒険物語の経緯は、タジのイラー探求にそっくり当てはまるものである。モヒの口を通してメルヴィルは、

「失われて久しい乙女、美しいアディを探し求めて流浪し、マママで追い払われた後、セレンシアでは上陸を歓迎されたが無意味で、そこはもう 1 つのマママにすぎなかった。私を追い続けて来た 3 人の妖婦は、ついに私を、アディ発見のかすかな見込みを餌にしてフロツェラ島におびき寄せ、そこでホーシャは私を彼女のとりこにした」(after many wild roving in quest of a maiden long lost—beautiful Ady! and after being repelled in Maramma; and in vain hailed to land Serenia, represented as naught but another Maramma;—with vague promises of discovering Ady, three sirens, who long had pursued, at last inveigled me to Flozella; where Hautia made me her thrall. —*ibid.*, Ch. 193, p. 648.)

と物語るが、セレンシアを「もう 1 つのマママにすぎない」と言っているところが鍵である。つまり、セレンシアもマママも根は同じキリスト教にあり、本能的直観により「私」タジは、マママの因習的キリスト教界にもセレンシアのキリスト信仰集団にも理想のイラーは存在しないと洞察したことを、この表現は含意していると考えられる。

セレンシアではババランジャ、ユーミィ、モヒ、メディアの順に跪き、アルマの愛に帰依したが、その場面にタジの姿はなかった。そのことの意味は、タジだけはアルマの愛に帰依しなかったということである。つまり「私」タジは、キリスト信仰集団内でキリスト的愛を实践するという生き方を拒否したのである。マママとセレンシアを併せて解釈すれば、「私」タジはキリスト教という制度のみならず、キリスト信仰それ自体を、少なくとも集団行為としてのキリスト信仰を拒否し否定したと推断できる。

3.3.2 「究極の罪」とは何か？——社会的自殺行為

マーディの外へ向けて 1 人で舟を漕ぎ出すタジに対してユーミィが言う「究極の罪」とは何か？「マーディよ、さらば！」(Mardi, farewell!) と言い、イラーの残像を追ってリーフの出口から外洋に出ようとするタジに向かって、青年詩人ユーミィは「やめろ、タジ、究極の罪を犯すな！」(Nay, Taji: commit not the last, last crime! —*ibid.*, Ch. 195, p. 654.) と叫ぶ。「究極の罪」とは何を指すのか？

マママ島上陸で始まるマーディ巡航第 2 ラウンドでババ

ランジャは「最も恐ろしい罪」についてユーミィにこう話していた。

「魂を殺すよりは身体を殺したほうがよい。もし自らの身体を殺人者になることが最も恐ろしい罪だとしたら、魂の自殺者となるのは、どれほど恐ろしい罪であろうか」。(Better slay the body than the soul; and if it be the direst of sins to be the murderers of our own bodies, how much more to be a soul-suicide. —*ibid.*, Ch. 135, p. 426.)

「究極の罪」とは、この自殺行為を指していると考えられる。メルヴィルはユーミィの口を通して、「私」タジがマーディというオロ教世界、つまりキリスト教社会を否定することは自殺行為に等しいと言っているのである。セレンシアでのアルマ信仰、つまりキリスト信仰を否定し、世間に背を向ける「私」タジの最終行動は、その社会で暮らす一員としての「私」の社会的死を意味する。

3.3.3 なぜタジはマーディの外へ行くのか？——理想のイノセンスを求めて

マーディの外へと航海に出る「私」タジの最終行動は、マーディに背を向けて外海に出る時点では社会的自殺行為として認識されうが、その後のタジの外洋での航海を視野に入れると、この行動の奥には別の意味が見えてくる。何のために、何を求めて「私」タジはマーディの外洋を航海しようとするのか？

タジは、フロツェラ島でホーシャと対話し交流しながら、ホーシャを通して手に入れることができる「美、健康、富、長寿、そして失われし究極の望み」(Beauty, Health, Wealth, Long Life, and the Last Lost Hope of man —*ibid.*, Ch. 194, p. 651.) といった「人生の歓び」(all the sweets of the life —*ibid.*) よりも、「私の中で死滅し葬られているものに対する苦き思い」(all the bitterness of my buried dead —*ibid.*)、すなわち「過去とイラー」(the Past and Yillah —*ibid.*, Ch. 195, p. 652.) の方を選択する。タジが欲するものは、開眼して味わう現世の歓びではなくて、失われた過去のイノセンスである。

「私」タジがマーディの外海を航海して追求するものは、かつて現実世界に存在した理想のイラー、理想のイノセンスの回復である。イラーを探し求めてマーディの外へと乗り出す「私」タジの姿は、あくまで純真無垢を理想とし、それに至上の価値を置く作家メルヴィルの姿勢を表している。

3.4 最後の情景——良心の追求へ

「私」1 人が乗る舟が潮の流れに乗って外海に飛び出すと、矢を構えた 3 人の復讐者たちを乗せた舟が後に続き、「かくして、追う者と追われる者が果てしない海を飛び続けた」(And thus, pursuers and pursued flew on, over an

endless sea. — *ibid.*, Ch. 195, p. 654.) という一文で物語は終わる。

作品最後の情景をどう解釈したらよいか？イラーを追いつけるタジが復讐者に追われ続ける最後の情景には、メルヴィルの飽くなき追求姿勢が凝集されている。追求対象は2つ、理想のイノセンスと自己の良心である。

理想のイノセンスに対する飽くなき追求姿勢は、ラストシーンに至る前に予告され文言化されていた。マーディ巡航第3ラウンドの地球周航を終えた直後に語り手の「私」は、

「たとえ黄金色の安息地は得られなかったとの評決が出るとしても、低俗な浅瀬に浮かんでいるよりは、勇気ある探求の中で無限の深みに沈んだほうがましだ。神々よ、もし難破するなら徹底的な難破をわれに与えよ」(if... the verdict be, the golden haven was not gained; — yet, in bold quest thereof, better to sink in boundless deeps, than float on vulgar shoals; and give me, ye gods, an utter wreck, if wreck I do. — *ibid.*, Ch. 169, p. 557.)

と、その姿勢を表明していた。また、セレンシア上陸以降もイラー探求の航海を続けるタジに対して、メディア、モヒ、ユーミィは探求を断念させようと説得を試みるが、「私」タジは、

「私は休むことを知らぬハンターだ！家をもたぬ探求者だ！私の求める彼女は私の前から飛び去って行くが、私は彼女の後を追う。たとえ彼女が私をリーフの彼方へ、陽の射さない海原を通して、夜と死の中へと導いても、すべての島々と星々を探し回り、何があろうとも彼女を見つける！」(I am the hunter, that never rests! the hunter without a home! She I seek, still flies before; and I will follow, though she lead me beyond the reef; through sunless seas; and into night and death. Her, will I seek, through all the isles and stars; and find her, whate'er betide! — *ibid.*, Ch. 189, p. 638.)

と宣言し、この作品の結末を予告していた。

もう1つの追求対象である自己の良心は『マーディ』ではテーマ化されていない。自己の良心追求は未解決の課題であるという認識をメルヴィルは最後の情景で提示した。そして彼は、白人としての自己の良心を後の『モービィ・ディック——鯨』(*Moby-Dick; or, The Whale*, 1851)で追求する。

3人の復讐者たちは『マーディ』第1巻の最後の島モンドルドでタジの前に出現して呪詛の言葉を叫んでいた。「おお、人殺しめ！白い呪いをお前に！我らの憎悪によりお前の魂が白化すればいい！」(Oh murderer! white

curses upon thee! Bleached be thy soul with our hate! — *ibid.*, Ch. 100, pp. 306-7.) と。復讐者たちは、サンゴが白化して死滅するように、「私」タジの魂が白化して死に至るようにと呪い、さらに「お前の白い心臓を食ってやる！」(your white heart will we have! — *ibid.*, Ch. 100, p. 308.)とわめいていた。

3人の復讐者たちは太平洋の現地人として設定されており、彼らは白人としてのメルヴィルの罪の意識と良心の呵責を代弁している。そして、この良心の呵責がメルヴィルを探求に駆り立てる原動力となっている。復讐者たちの憎悪は『モービィ・ディック』でエイハブに化身し、白人の魂と良心は白い鯨に姿を変えて出現する。

4. おわりに——評価

「日本国の皇帝たる公方様は、龍頭を舐先につけた船、いわば水に浮かぶジャガナートを持ち、その中で海神たちに香を焚いた」。(Kumbo Sama, Emperor of Japan, had a dragon-beaked junk, a floating Juggernaut, wherein he burnt incense to the sea-gods. — *ibid.*, Ch. 149, p. 482.)

タジ一行がマーディ巡航第3ラウンドの地球周航を開始した時点で、ドミノラ（つまりイングランド）の王様用カヌーについて叙述するメルヴィルは、世界の戦闘用および儀式用豪華船を列挙するが、その一例として、上記のように日本の御座船に言及している。『マーディ』は、日本国の江戸幕府体制が終焉に向かおうとする時代、ペリー来航（1853年7月）の5年前に書かれた作品である。今から160年前のその当時、この作品は西洋社会でどう評価されたのだろうか？

『マーディ』は1849年3月15日にロンドンで、続いて4月13日にニューヨークで出版され、各紙が書評を発表し始めると、メルヴィルは岳父レミュエル・ショー（Lemuel Shaw）宛ての手紙（1849年4月23日付）の中で次のように書いた。

「『マーディ』は *London Atheneum* によって切りつけられ、*Boston Post* の絞首刑執行人により火をつけられました。しかし *London Examiner* や *Literary Gazette* などの大西洋のこちら側の各紙の評は違います。こうした攻撃は当然のもので、不滅の評判が形成されるためには不可欠のものです。そうした名声が私のものになるとしたらの話ですが、“こんなことに何の意味もない！”と理解力のない者はユークリッド原論の命題I-47を投げ出して叫びました。“こんなことには何の意味もない”——問題を突きつけられた批評家もこう言っているようなものです。しかし、すべての謎を解く‘時’が『マーディ』を解明するでしょう」。(I see that Mardi has been

cut into by the London Athenaeum, and also burnt by the common hangman in the Boston Post. However the London Examiner & Literary Gazette; & other papers this side of the water have done differently. These attacks are matters of course, and are essential to the building up of any permanent reputation—if such should ever prove to be mine.—“There’s nothing in it!” cried the dunce, when he threw down the 47th problem of the 1st Book of Euclid—“There’s nothing in it”—Thus with the posed critic. But Time, which is the solver of all riddles, will solve “Mardi.”¹⁰⁾

ユークリッド原論の命題I-47「直角三角形において、直角の対辺の平方は、直角を挟む2辺の平方の和に等しい」が『マーディ』の謎を解く鍵だということではもちろんない。ここでメルヴィルが意味したことは、批評家たちは学力の低い生徒のように『マーディ』を解明できていないということだったのであろう。

この手紙の中で言及されている4紙に発表された書評を読んでみよう。*The Athenaeum* (March 24, 1849) は以下のような否定的な書評を載せた。

「この奇妙な本を開くと読者はまず、その気取った文体に出くわすだろう。そして、そこには多くの狂気が入り混じっている…もしこの本が楽しい本として意図されているのだとしたら、奇妙なことに楽しい笑いが消えている。寓意物語としてなら、この箱の鍵は“深海の底に埋められている。”ロマンスとしてなら、長たらく退屈で、失敗である。散文詩としてなら、幼稚だという批判があてはまる」。(On opening this strange book, the reader will be at once struck by the affectation of its style, in which are mingled many madnenses... If this book be meant as a pleasantry, the mirth has been oddly left out — if as an allegory, the key of the casket is “buried in ocean deep” — if as a romance, it fails from tediousness — if as a prose-poem, it is chargeable with puerility.)¹¹⁾

そして *Boston Post* (April 18, 1849) は次のように酷評した。

「交わされる会話は、これまで読んだことも聞いたこともないようなもので、もし何らかの意味があるとしても、難解で深遠すぎて、少なくとも私たちの理解力では測り知れない。物事全般に対する諷刺本のように思えることもあるが、そうした考えも、全くのナンセンスな記述が多々登場することによって、すぐに消えてしまう。登場人物たちは“軍団”のような感じで、おもしろみがない。本全体が退屈だけでなく読むに値しない」。

(The conversations are like nothing one ever read or heard, and, if they have any significance, are too recondite, at least, for our intelligence to fathom. Sometimes it seems as if the book were a satire upon matters and things in general, but this idea is soon dispersed by the appearance of a mass of downright nonsense. The characters are “legion” and uninteresting—the whole book is not only tedious but unreadable.)¹²⁾

The Literary Gazette (March 24, 1849) は、エピソードの集積という形態をもつこの作品を肯定的にとらえて「これほどまでに万華鏡のような本を見たことがない」(We never saw a book so like a kaleidoscope.)¹³⁾ と評したが、それでも「奇異な本」(a strange book)¹⁴⁾ と呼んだ。

また *The Examiner* (March 31, 1849) は、作家の力量を認めつつも、次のように評した。

「大量の空想的思索、生き生きとした描写、風刺的叙述、寓意的類型化が、ほとんど無秩序に、連関なしに投入されている。その結果、この本のおもしろさの程度は、この本の執筆に使われた明敏な頭脳と能力の総量と釣り合わなくなっている」。(A heap of fanciful speculations, vivid descriptions, satirical insinuations, and allegorical typifications, are flung together with little order or connexion; and the result is a book of which the interest is curiously disproportioned to the amount of cleverness and ability employed in it.)¹⁵⁾

こうした書評の数々を読んだメルヴィルは、ロンドンの出版者リチャード・ベントリー (Richard Bentley) に宛てた手紙 (1849年6月5日付) に中でこう書いた。

「大西洋のそちら側の批評家たちは一斉攻撃を『マーディ』に浴びせたようですが、それは全く予期されていなかったことではありません…お気づきかと思いますが、娯楽読本としての評価が下されています…しかし、読者として意図された人々には理解されるでしょう。『マーディ』はそのより高い目的においては無駄に書かれてはいないという確信を私はすでに得ています。

あなたは心の中で、こうお思いかもしれませんが、無関心あるいは軽蔑を装う仮面を被ってでも、一般読者から攻撃されない、彼らを喜ばすただけに計算して書かれた本を出すことができただろうに、あんな本を書く者は愚かで、分別を欠いていると。しかし私のような物書きの心の中には、何か得体の知れない制御不可能なものが常にあり、それがこうしろ、ああしろと命じるのです。そしてそれはそうしなければならないのです。当ろうが外れようがです」。(The critics on your side of the

water seem to have fired quite a broadside into “Mardi”; but it was not altogether unexpected... as you may be aware yourself, it is judged only as a work meant to entertain... However, it will reach those for whom it is intended; and I have already received assurances that “Mardi,” in its higher purposes, has not been written in vain.

You may think, in your own mind that a man is unwise,—indiscreet, to write a work of that kind, when he might have written one perhaps, calculated merely to please the general reader, & not provoke attack, however masqued in an affectation of indifference or contempt. But some of us scribblers, My Dear Sir, always have a certain something unmanageable in us, that bids us do this or that, and be done it must—hit or miss.)¹⁶⁾

否定的な書評は『マーディ』の文体の「気取った感じ」(affectation), 「銜学性」(pedantry), 「幼稚さ」(puerility)を指摘しており, 例えば *Blackwood's Edinburgh Magazine* (August, 1849) は「何というくずの塊か! …全編を通じて文体は気取っていて, 銜学的で, 退屈きわまりない」(Why, what trash is all this!—...the style of the whole being affected, pedantic, and wearisome exceedingly.)¹⁷⁾とこき下ろした。

The United States Magazine and Democratic Review (July, 1849) は, 以下のような一歩踏み込んだ肯定的な評価を下した。

「『マーディ』は世界を映し出す寓意物語だという事実を, これまでの批評家たちは見逃している。この本の形態はユニークで, 新しいものはすべてそうであるように, 一般的でないという理由から醜いと思われるリスクを負わなければならないのである」。(The fact that Mardi is an allegory that mirrors the world, has thus far escaped the critics... The manner of the book is unique, and like all new things must take the chance of being considered ugly, because it is uncommon.)¹⁸⁾

『マーディ』の出版から1世紀が経った頃, モーム (W. Somerset Maugham, 1874-1965) は『モービー・ディック』を世界の十指に入る小説として評価しながらも, 『マーディ』に関しては「長たらしくて, 私には退屈に思えた」(It is long-winded and, to my mind, tedious.)¹⁹⁾と評した。

物語, 小説としての『マーディ』の評価は否定的なものが多いが, 読む価値があるかないかについては個々の読者が判断を下さなければならないだろう。筆者はこの作品を2度読んだ。1度目は遠い学生時代に, そして今回論考を

するにあたって再読した。確かに物語としては挿話が多すぎて退屈なところがあるが, この寓意ロマンスはメルヴィルの真実追求姿勢を理解するためには必読の書である。

また, 海洋文学としての側面から見る時, 『マーディ』導入部での捕鯨ボートによる航海と海の描写は生き生きとした魅力に富んでいて, 海洋へのロマンを駆り立てる。元捕鯨船員メルヴィルは処女作『タイピー』ではポリネシアの島とそこに住む人々を描き, 船や海についてはほとんど語らなかった。第2作『オムー』では物語の前半で, 船, 特に船首楼の船員部屋と乗組員たちを詳細に描いたが, ポリネシアの海を描くことはなかった。彼は第3作『マーディ』で初めて海を描いたのである。『マーディ』の導入部—第1章から第38章—では, 南および中太平洋の朝, 昼, 夕, 夜の海のさまざまな姿と海洋生物²⁰⁾, そして天空の星座が細かに描写されている。海のロマンを追う読者には必読である。

(了)

註

- 1) 五十嵐博「『マーディ』での若きメルヴィル—(1) —喪失と幻滅—」, 『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第6巻第2号, p. 48.
- 2) Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* (New Haven: Yale University Press, 1960), p. 71.
- 3) 『マーディ』のテキストは Herman Melville, *Mardi: and A Voyage Thither* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968) を使用し, 引用には章と頁数を付した。
- 4) ある研究者は「マラマ島はキリスト教会組織と聖職者たちの専横さと教条主義を表す」(Maramma... stands for ecclesiastical tyranny and dogmatism —Newton Arvin, *Herman Melville* [New York: The Viking Press, 1950], p. 91) と解釈している。別の研究者は, マラマ島は「不毛で陰鬱な宗教的迷信の地」(a land of barren and morose religious superstition — Merrell R. Davis, *Melville's Mardi: A Chartless Voyage* [Hamden, Conn.: Archon Books, 1967], p. 147) として描かれており, 「宗教的迷信と宗教的官僚主義が風刺されている」(religious superstition and religious officialdom... are satirized in the description of the island of Maramma. — *ibid.*, p. 150) と解釈し, 「ヒヴォヒティ—1848世 (新ローマ法王が1847年に就任した) という言及に見られるように, 特にカトリック教会が攻撃されているふしがあるが, この風刺は時事的なものではなく, また1つの宗派に限定されたものでもない」(Although there are certain indications that the Catholic Church is specifically under attack, as in the reference to “Hivohitee MDCCCXLVIII” (a new Pope had taken office in 1847), the satire can scarcely be called topical, nor is

it limited to one religious sect. — *ibid.*, pp. 150-1) とコメントしている。

- 5) Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1987), p. 303.
- 6) [] 内の語は筆者が補った。以下同じ。
- 7) メルヴィルは『マーディ』の英国版をエヴァート・A・ダイキンク (Evert A. Duyckinck) に贈呈した際、添え状 (1850年2月2日付) に「『マーディ』は、未開の神秘的なモルモン教徒のように追い立てられ、追放され、避難所なき状態にある」([Mardi] has been driven forth like a wild, mystic Mormon into shelterless exile. — Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* [New Haven: Yale University Press, 1960], p. 102) と書いた。1830年創設の当時新興のモルモン教が、セレニアに住むキリスト教集団という設定の部分的モデルになったのかもしれない。
- 8) 『オムー』のテキストは Herman Melville, *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968) を使用し、引用には章と頁数を付した。
- 9) Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1987), pp. 231-2.
- 10) Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* (New Haven: Yale University Press, 1960), pp. 84-5.
- 11) Jay Leyda ed., *The Melville Log* (New York: Gordian Press, 1969), p. 293.
- 12) Hershel Parker ed., *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846* (The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970), p. 15.
- 13) *The Melville Log*, p. 293.
- 14) *Ibid.*
- 15) *The Melville Log*, p. 295.
- 16) *The Letters of Herman Melville*, pp. 85-6.
- 17) *The Melville Log*, p. 311.
- 18) *Ibid.*, p. 310.
- 19) W. Somerset Maugham, *Ten Novels and Their Authors* (London: Vintage, 2001), p. 211.
- 20) Merrell R. Davis は、メルヴィルが『マーディ』の導入部を執筆するに際して、特にサメ、トビウオ、ブリモドキ、メカジキ、夜光虫などの海洋生物の情報源として参照した本 (Frederick Debell Bennett, *Narrative of a Whaling Voyage* [London: Richard Bentley, 1840]) の該当箇所と『マーディ』での記述とを並置して比較しながら、

「情報源の本での説明が『マーディ』では生彩に富む記述に変容しているさま」(how the information in the source was transmuted into the colorful account that it is in *Mardi* — Merrell R. Davis, *op. cit.*, p. 113) を提示している (See *ibid.*, pp. 113-5, 123-4)。

参考文献

- Anderson, C. R. *Melville in the South Seas*. New York: Dover Publications, 1966.
- Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.
- Auden, W. H. *The Enchafed Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*. New York: Vintage Books, 1950.
- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday Anchor Books, 1957.
- Davis, Merrell R. *Melville's Mardi: A Chartless Voyage*. Hamden, Conn.: Archon Books, 1967.
- Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
- Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.
- 林信行『メルヴィル研究』東京：南雲堂，1958。
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. Penguin Books, 1971.
- Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
- Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Maugham, W. Somerset. *Ten Novels and Their Authors*. London: Vintage, 2001.
- Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.

- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.
- Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.
- 酒本雅之『砂漠の海ーメルヴィルを読む』東京：研究社，1985.
- Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
- 曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店，1972.
- Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.
- Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
- Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.

要 旨

『マーディ』は寓意物語で、そのメイン・テーマはマーディと名づけられた現実世界であり、そこには罪と悪がはびこっている。主人公のタジと彼の仲間たちは理想のイノセンスと幸福、平安を探し求めるが、マーディ内のいたるところで目にする数々の不正と悪徳に幻滅させられる。

最も嫌悪すべきは陰鬱なマラマ島で、人々を強圧的に支配しているキリスト教体制の寓喩であるこの島の制度化された宗教をタジ一行は拒絶する。後天的知恵に基づくメルヴィルの理性的判断を代弁するババランジャは、「聖職者や礼拝堂なしで」キリストの愛と信が実践されているセレンニア島にとどまることにし、そこで彼は航海を終える。メルヴィルの本能を代弁するタジは、マーディに背を向け、失われしイノセンスを追い求めて外海に出るが、同時に、メルヴィル自身の罪の意識の化身である復讐者に追われる。

最終章でのタジの最終行動は、キリスト教界とキリスト信仰を含めた人間世界の現実に対する全面的拒否と否定を含意している。